

## <特集 日本研究の過去・現在・未来>日本ポピュラー・カルチャー研究の「昨日・今日・明日」

著者	谷川 建司
雑誌名	日本研究
巻	55
ページ	105-115
発行年	2017-05-31
その他の言語のタイトル	Research on Japan's Popular Culture
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00006579">http://doi.org/10.15055/00006579</a>

## 日本ポピュラー・カルチャー研究の「昨日・今日・明日」

谷川 建司

「政治学」「経済学」「文学」「歴史学」「文化人類学」など、アカデミアにおいて古くからディシプリンが確立していて、「く学」という呼称が定着している学問分野と比べた時に、「ポピュラー・カルチャー研究」、「ポップカルチャー研究」あるいは「大衆文化研究」というと、そこに含まれるべきジャンルについての捉え方は様々であり、厳密な意味でのその定義が共有されている訳でもない。一般的には、マンガ、アニメ、ゲームといった、経済産業省が「クール・ジャパン」と括<sup>くく</sup>つているような分野が中心となることはある程度共通の理解になっているが、では「クール・ジャパン」に含まれる日本の食文化や茶道・華道などについてはどうか。あるいは、「映画」というメディアについては欧米で盛んな「フィルム・スタディーズ」という独立した分野と捉える考え方もあるが、マン

ガ、アニメなどとの密接な関係性からはこれを「ポピュラー・カルチャー研究」の一つのサブ・ジャンルと捉えて内包させる考え方もある。さらには、「ポピュラー・カルチャー研究」にはファッショ<sup>ン</sup>、建築、Jポップ（音楽）から食玩（フィギュア文化）、メイド喫茶、AVアイドルまでも含みうる。本論考では、それら全てを含めた緩やかな概念としての「ポピュラー・カルチャー研究」という立場をとりたい。

まず、本稿のタイトルを「日<sup>、本</sup>のポピュラー・カルチャー研究の昨日・今日・明日」ではなく「日<sup>、本</sup>ポピュラー・カルチャー研究く」としたのは、前者だと「日本における（海外での事象を対象としたものを含む）ポピュラー・カルチャー研究」という意味にも取れてしまうからで、ここで扱おうと思っているのは、あくまでも

「日本発のポピュラー・カルチャーについての（海外の研究者によるアプローチを含む）研究」の動向を考えているからである。また、「日本ポピュラー・カルチャー研究の過去・現在・未来」とせずに、「〴〵の昨日・今日・明日」としたのにもそれなりの訳がある。こゝで対象として想定している「ポピュラー・カルチャー」の定義や範囲としては、現在の「旬の話題」（Current Topic）として主として若者によってリアルタイムで享受されている若者文化（Youth Culture）、都市文化（Urban Culture）、現代文化（Modern Culture）などの緩やかな総称としてのそれであり、例えば「歌舞伎」などの文化は、現代においても中高年を中心に、また一部若者にも享受されているし、それが生まれた時代においては明らかに「ポピュラー・カルチャー」だったとはいえ、今日的な意味での「ポピュラー・カルチャー研究」というと普通は想定されないだろうから一応除外する、ということになる。とすると、百年前はとんがった「ポピュラー・カルチャー」だったけれども今ではむしろ「伝統文化」とカテゴライズされるような「過去」の流行文化ではなく、十年前や十年後がどうであるかは判らないにしても、いまそこにある問題意識として昨日も、一年前も、そして明日も、一年後も「旬の話題」として認識されているであろうような事象を研究対象とした「ポピュラー・カルチャー研究」の動向ということになるから、「今日」という地点と断絶感のある「過去」「未来」ではなく、「今日」との連続性が前提

となる「昨日」「明日」の方が相応しいと思うのである。

もう少し違った視点で考えるならば、筆者がまだ学生だった三十年以上前の「過去」には研究の対象とはとても見做されなかったような領域でも、今では立派な研究対象となり、博士論文のテーマとしても認められるようになった領域というものがある訳で、それこそがここであるところの「日本のポピュラー・カルチャー」ということである。例えば一九六四年六月公開のイタリア映画に『昨日・今日・明日』という作品がある。——三十年前であれば、同作品の監督であるビットリオ・デ・シーカというイタリア映画界の巨匠についてであれば映画作家研究として論文のテーマとなり得ただろうが、『昨日・今日・明日』という作品自体は作品分析の対象としては不適合と見做されていただろう。なぜならば、この作品は艶笑コメディであり、妻が投獄されるのを避けるために次から次へと妊娠・出産させる男を描いたエピソードなどを扱っているからである。臨月姿のソフィア・ローレンの立ち姿に「スタミナに敬礼！」のコピーを付けたこの作品は、その内容ゆえに配給会社の日本ヘラルド映画によって小野薬品の強壮剤「リキホルモ」とのタイアップが大々的に行われ、その強壮剤のCMソング「昨日・今日・明日」を、当時まだ高校生だった奥村チヨが唄っていた。今ならば、映画宣伝と製薬会社とのタイアップの在り方にしても、CMソングにしても、高校生アイドル歌手にしても、立派に博士論文のテーマとなるだろう

う。

さて、それではそういった意味での「日本のポピュラー・カルチャー」への関心が高まり、研究対象として提案され、受け入れられ、認知されるようになったのは一体いつ頃のことだったのだろうか。少なくとも、一九九〇年代には東アジアや東南アジアにおいて日本のポピュラー・カルチャーが極めて高い人気を獲得していたことは岩渕功一も指摘しているところだが（岩渕、二〇〇一年）、個々の研究者の関心がそういった「日本のポピュラー・カルチャー」に向かい始めたのはもう少し後のことではないかと思う。研究者の関心が「日本のポピュラー・カルチャー」に向かい始めたのは一九九〇年代の後半、つまり今から二十年ほど前あたりからだったにしても、そういった事象を捉えて分析を試みた本格的な論考が出てくるのはもう少し時間が経った、二〇〇〇年代に入ってからくらのことではなかっただろうか。

国立情報学研究所のデータベース「CINii Articles」で検索ワードとして「ポピュラー・カルチャー」を入力して検索すると瞬時に二〇四件の結果が出てくる（最終閲覧：二〇一七年一月四日）が、それらの中で、本論考で想定している（海外での事象を含まないという意味で）狭義の「日本のポピュラー・カルチャー」を扱っていると思われるものとして目を引くのは、早い時期のものでは矢部恒彦の「ポピュラー・カルチャーとしての都市景観研究」（二〇〇〇年、

二〇〇一年、二〇〇五年）、岡田章子による「女性雑誌における欲望の主体化と消費のイデオロギー——80年代『*ray・ray*』におけるタイトル・レトリックの分析」（二〇〇一年）、周典芳の「叶姉妹考——カルチュラル・スタディーズの視点から見るボディメイキング」（二〇〇二年）といったあたりである。二〇〇〇年前後というと、筆者がちょうど一九九九年から二〇〇〇年にかけて米国のコロンビア大学に客員研究員として滞在していた時期にあたる。筆者自身の経験を踏まえて述べるならば、筆者にコロンビア大学東アジア研究所の研究室を貸してくれていた（そして自身は入れ替わりに日本に、おそらくは日文研「国際日本文化研究センター」にいたと記憶しているが）ヘンリー・D・スミス（Henry D. Smith）が、元々の専門である浮世絵などから研究対象を広げて、『新世紀エヴァンゲリオン』を研究している、と聞いても当時はまだまだ道楽にしか思えなかった（その意味でスミスの問題意識は一步先を行っていた）し、一九九九年十一月から十二月にかけてニューヨークのバーガーキングのキッズ・ミールにポケモンのカードとおもちやが付いてくるキャンペーンが行われていて、異常な人気を博していたという記憶はあるものの、それがやがて論文のトピックとなりうる事象であるとは当時は思いもしなかったというのが正直なところだ。

だが、世の中全体が「日本のポピュラー・カルチャー」への視線を熱くし始めていたのがこの時期であることは間違いなく、振り

返つてみればパリで第一回「ジャパン・エキスポ (Japan Expo)」が開催されたのも二〇〇〇年のことだった。「ポピュラー・カルチャー」を学問として扱う主戦場として想定されていたカルチュラル・スタディーズに関する入門書などが日本で相次いで刊行されたのも、一九九九年から二〇〇〇年にかけてのことだ。また、この分野の論考集としては最初期の試みであったと思われる、ジョン・ホイッティア・トリート (John Whittier Treat) の *Contemporary Japan and Popular Culture* が刊行されたのはやや早い一九九六年、またティモシー・クレイグ (Timothy J. Craig) が編んだ *Japan Pop: Inside the World of Japanese Popular Culture* が出たのは二〇〇〇年だ。後者は編者を含めて十七名の研究者の論考を収録したもので、カナダのヴィクトリア大学アジア太平洋イニシアティヴ (CAP I) での研究活動がベースとなつている。ゴジラ、美空ひばりからコム・デ・ギャルソン、吉本ばなな、カラオケまで雑多なトピックを扱っている前者の場合も含めて、これら初期の論考集は、今日的な視点で見れば何をもつて「ジャパン・ポップ」と位置付けるのかについての統一的な指針がないままに寄せ集めた感じが強いし、やや古臭い（つまり十七年後の二〇一七年時点では最早「過去」の事象となつたような）トピックも含まれているものの、まずは何か形にしてこの分野への関心を喚起するという点においては大きな意味をもったプロジェクトだったはずである。また、一九九九年と二〇〇〇年の二度の共同調査に

参加した日韓の研究者たちによつてまとめられた朴順愛・土屋礼子編『日本大衆文化と日韓関係——韓国若者の日本イメージ』も二〇〇二年に刊行されているが、このプロジェクトも「日本のポピュラー・カルチャー」についての国際的な研究の枠組みを提示した試みとして重要で、また収録された個々の論考の相互の関連性は高いとは言えずそれぞれの筆者の専門分野に特化したものではあるものの、付録として収録された「韓国若者の日本キャラクター意識と対日イメージ形成」「韓国若者のテレビアニメ意識と対日イメージ形成」のデータは、後続の研究者たちにとつての有益な情報ソースとなり得た貴重な成果だったと言える。

また、「日本のポピュラー・カルチャー」についての個々の研究ではなく、「日本のポピュラー・カルチャー」が注目すべき事象であることを指摘し、その位置付けを試みようとするような論考も、二〇〇一年くらいから目に付くようになってきた。今日の「クール・ジャパン」に繋がってくる概念として、ダグラス・マックグレイ (Douglas McGray) による論文 *Japan's Gross National Cool* が *Foreign Policy* 誌上に掲載されたのは二〇〇二年であり、日本の研究者では岩瀬功一の『トランスナショナル・ジャパン——アジアをつなぐポピュラー文化』が二〇〇二年に刊行されている。日本でも翻訳本が出て話題となつたジョセフ・ナイ (Joseph Nye) の *Soft Power: The Means to Success in World Politics* (『ソフト・パワー——21世紀国際政治を

制する見えざる力』日本経済新聞社、二〇〇四年）が刊行されたのは二〇〇四年だった。

様々な学問分野の研究者が集まって一定期間の共同研究を行う形や、単発のワークショップやシンポジウムを開催して議論していく形での「日本のポピュラー・カルチャー」についての研究というものも、二〇〇〇年代に入ってから活発に行われるようになってきた。日文研で二〇〇三年から二〇〇六年にかけて開催された山田奨治を代表とする共同研究会「コマーシャル映像にみる物質文化と情報文化」（山田班）もそうした試みの一つだったと位置付けられよう。

この共同研究会では、テレビCMという素材を用いてどのような研究が可能か、という問題意識からスタートし、個々のメンバーの発表に対する徹底的な議論をベースに研究を積み重ね、最終的には国際研究集会「売る文化、売られた文化——テレビコマーシャルによる文化研究を探る」（二〇〇六年三月）を開催したうえで、二〇〇七年に山田奨治編『文化としてのテレビ・コマーシャル』（世界思想社）としてまとめられた。単発のワークショップをベースとした共同研究の成果としては、例えば二〇〇四年に国士館大学アジア・日本研究センターで行われたワークショップでの議論が、二〇〇五年に土佐昌樹・青柳寛編『越境するポピュラー文化と（想像のアジア）』（めこん）として刊行されている。

こうした共同研究会や単発のワークショップは、そこに参加する

個々の研究者同士の新たな連携の枠組みに繋がってくるケースが多いのだが、例えば日文研共同研究会山田班のメンバーだった北京外国語大学の呉咏梅は、二〇〇七年に同大学で開催された国際シンポジウム「二十一世紀における北東アジアの日本研究」の分科会として「東アジア地域における日本ポピュラー・カルチャー」というパネルを企画し、ここにやはり山田班にいた谷川建司と、香港大学の王向華が参加したことで、この三人で新たな枠組みでの「日本のポピュラー・カルチャー」についての国際共同研究を香港大学で行っていくことになり、二〇〇八年三月にその第一回目の試みとして Conference: Japanese Popular Culture in Asia を開催した。その後、二〇〇九年二月に第二回目の Conference: Intercultural Flow in East Asia を、二〇一〇年二月には第三回目の Workshop: New Possibilities of Trans Asian Anime Studies を開催し、改めてこの枠組みを Asian Global Cultural Forum (AGCF) と名付けてさらなる活動を行っていくこととなった。ちなみに、AGCFではそのメンバーを固定化しない方針をとり、主宰者の個人的なネットワークによって「日本のポピュラー・カルチャー」に関心をもつ研究者たちに広く参加を呼びかけ、また投稿募集 (Call for Paper) を広く流通させて大学院生などの若手研究者からの応募を募った。そして、常にオープンな議論の場を確保しつつ、日本、韓国、中国、香港、台湾といった東アジアの研究機関に属する研究者たちを中心に、イギリスやデンマーク、



オーストラリアなどそれ以外のエリアで「日本のポピュラー・カルチャー」に関心をもつ研究者たちの緩やかなネットワークとして機能させる方向性で運営された。この方針の下、日文研の山田奨治、神戸大学の油井清光、韓国湖南大学の朴順愛、英国の漫画研究者ヘレン・マッカーシー（Helen McCarthy）、<sup>1</sup> 国士館大学での「越境するポピュラー文化と〈想像のアジア〉」に参加していたコペンハーゲン・ビジネススクールのブライアン・モラン（Brian Moran）といったメンバーの参加も得て、その後も二〇一〇年八月に AGCF Workshop: The Past, Present and Future of Popular Cultures through TV & Movies Industry: Intercultural & Transcultural Flow in East Asia を、同年十二月には AGCF Workshop: The East Asian Cultural Policies in Postwar Era: From Modernization to Globalization を、<sup>2</sup> また二〇一三年三月には Politics of Creative Industries: Critical Reflections をそれぞれ開催した。これら計六回のワークショップの成果は、これまでに日本で六冊、中国で二冊の論考集として刊行されている。即ち、青弓社から刊行された谷川建司・王向華・呉咏梅編による『拡散するサブカルチャー——個室化する欲望と癒しの進行形』（二〇〇九年）、『越境するポピュラーカルチャー——リコウランからタツキーまで』（二〇〇九年）、『サブカルで読むナシヨナリズム——可視化されるアイデンティティ』（二〇一〇年）、『サブカルで読むセクシュアリティ——欲望を加速させる装置と流通』（二〇一〇年）、谷川建司・

王向華・須藤遙子・秋菊姫編『コンテンツ化する東アジア——大衆文化／メディア／アイデンティティ』（二〇一二年）、森話社から刊行された谷川建司・須藤遙子・王向華編『東アジアのクリエイティブ産業——文化のポリティクス』（二〇一五年）、そして山東人民出版社から刊行された呉咏梅・王向華・谷川建司編『越境的日本大衆文化』（二〇一〇年）、『泛亞洲動漫研究』（二〇一二年三月）である。

個別の研究成果に関して述べるならば、同じ「日本のポピュラー・カルチャー」に関するものであっても、トピックによつてその研究の蓄積の多寡にはかなり差があり、元々少なくとも欧米においては独立した学問分野としての蓄積を有する「映画」に関する研究や、とりわけ海外の研究者の関心が高い分野であるマンガ／アニメについての研究成果は量も多く、また早い段階から多く刊行されているのに対して、ファッションや建築、Jポップ、食玩、メイド喫茶、AVアイドルなどといったニッチなジャンルになると、当然ながら量・質ともにまだまだ層が薄い。

マンガ／アニメに関する研究書はそれこそ百花繚乱で、個別の作家、例えば手塚治虫や宮崎駿に関するものなどは映画における黒澤明、小津安二郎から北野武に至る作家研究と同様に枚挙にいとまがないが、海外の研究者による本格的な論考としてはヘレン・マッカーシーによる *The Art of Osamu Tezuka: God of Manga* や、<sup>3</sup> スーザン・J・ネイピア（Susan J. Napier）による『現代日本のアニメ——A

KIRA』から『千と千尋の神隠し』まで』あたりが目立つた成果と言えるだろう。また、海外・日本を問わず、マンガ／アニメについての注目すべき個別の論考に関しては、大学などのいわゆる専門的な教育研究機関に属さない立場の著者によるものが多いというのが明らかな特徴で、それは取りも直さずこのジャンルへの興味関心がアカデミアという狭い世界ではなく、メディア企業や役所などで情報を発信する側の立場の人たち、つまり言わばオーディエンス、読者としてそれらを受容している一般の人たちをリードしていく立場でマンガ／アニメと接している情報発信者たちの、ぜひとも伝えたいという熱意、驚き、欲求、使命感といった感情に基づいて醸成されてきたという事実を示している。具体的に書名をいくつか挙げるならば、朝日新聞記者である草薙聡志の『アメリカで日本のアニメは、どう見られてきたか?』（徳間書店、二〇〇三年）、ニューヨークをベースとしたライター＆エディターであるローランド・ケルツ（Roland Kels）による『JAPANAMERICA: How Japanese Pop Culture has Invaded the U.S.』（Palgrave Macmillan, 2006）（『シヤパナメリカ——日本発ポップカルチャー革命』ランダムハウス講談社、二〇〇七年）、総合メディア企業ビズメディアCEOである堀淵清治による『萌えるアメリカ——米国人はいかにしてMANGAを読むようになったか』（日経BP社、二〇〇六年）、エッセイストのパトリック・マシアス（Patrick Macias）による『オタク・イン・USA——愛と誤解のAn

ime輸入史』（太田出版、二〇〇六年）、広告代理店勤務のフレッド・ラッド（Fred Lademan）と研究者ハーヴェイ・デネロフ（Harvey Denecoff）による『アニメが「ANIME」になるまで——鉄腕アトム、アメリカに行く』（NTT出版、二〇一〇年）、経済産業省勤務の三原龍太郎による『ハルヒ in USA——日本アニメ国際化の研究』（NTT出版、二〇一〇年）といったものが挙げられよう。

一方で、ニッチなジャンルの研究書としては、音楽に関するものは比較的蓄積があるものの、アイドル文化、ギャル文化、「かわいい」文化、ロリコンといった領域になると途端に心もとなくなり、ドナルド・リチー（Donald Richie）の『イメージ・ファクトリー——日本×流行×文化』（青土社、二〇〇五年）、仲川秀樹『メディア文化の街とアイドル』（学陽書房、二〇〇五年）、松谷創一郎『ギャルと不思議ちゃん論——女の子たちの三十年戦争』（原書房、二〇一二年）、古賀令子『「かわいい」の帝国——モードとメディアと女の子たち』（青土社、二〇〇九年）、高月靖の『南極一号伝説』（バジリコ、二〇〇八年）、及び『ロリコン』（バジリコ、二〇〇九年）といった特定の著者による特定の成果が思い浮かぶくらいである。

さて、ざっと駆け足で「日本のポピュラー・カルチャー」についての「昨日」から「今日」にかけての状況を概観してきたが、そんな中で「日本のポピュラー・カルチャー」研究の拠点として期待さ



れている日文研の役割について触れておきたい。二〇一四年度の日文研の共同研究は全部で十六の研究課題が進行していたが、その中で全体の約三分の一にも及ぶ実に五つの共同研究会が広い意味での「日本のポピュラー・カルチャー」に関係するものであった。具体的には、「昭和戦後期における日本映画史の再構築」（代表…谷川建司）、「昭和40年代日本のポピュラー音楽の社会・文化的分析——ザ・タイガースの研究」（代表…磯前順一）、「日本大衆文化とナショナリズム」（代表…朴順愛）、「おたく文化と戦時下・戦後」（代表…大塚英志）、そして「マンガ／アニメで日本研究」（代表…山田奨治）の五つである。おそらく、日文研の三十年の歴史の中でも、これほどまでに「日本のポピュラー・カルチャー」に対するウェイトが高くなったことはなかったのではないかと思う。そのことは、それだけこの分野の研究への関心が高まっているという事実を示していると同時に、この分野に関心をもつて来日している海外からの研究者たちを含めて、人的資源が集中的に日文研という場所に集まっているということ、即ち日文研が文字通りの「日本のポピュラー・カルチャー」研究の中心地として機能し始めていることを示していると言えるのではないだろうか。五つの共同研究会のうち、二〇一四年度単独または二〇一四年度が最終年度だった三つの共同研究会についてはすでにその成果が論考集として出版されている。即ち、磯前順一・黒崎浩行編『ザ・タイガース研究論』（近代映画社、

二〇一五年）、朴順愛・谷川建司・山田奨治編『大衆文化とナショナリズム』（森話社、二〇一六年）、谷川建司編『戦後映画の産業空間——資本・娯楽・興行』（森話社、二〇一六年）である。

もつとも、日文研が本来の意味で「日本のポピュラー・カルチャー」研究の拠点として国内外のアカデミア・コミュニティにおいて認知されていくためには、単に一年間なり三年間なりの共同研究会を実施しました、というだけでなく、その成果を世に問い、時には厳しい批判の目に晒されながらも、フィードバックを基に個々の研究内容を検証し、さらに継続的に研究を深めていくことが必要であることは明らかであろう。また、ある程度の時間的経過の中で過去の共同研究のあり方がどうであったか、自己検証していく努力もまた必要であろう。

その意味でプロトタイプとなり得るのは日文研で二〇〇三年から二〇〇六年にかけて開催された共同研究会「コマールシャル映像にみる物質文化と情報文化」（山田班）であるように思われる。同研究会は、前述の如く二〇〇六年三月に国際研究集会を開催して終了したが、テレビCMのアーカイヴスが日文研を始めとして京都精華大学や立命館大学アート・リサーチセンターなど京都に集中していたことから、その後も関西圏の研究者らが「テレビCM研究プロジェクト」として発展的に継続させている。さらに当初の研究会の終了から十年目の節目である二〇一六年二月には、当時のメンバーが日

文研に集まってシンポジウム「CM研究の展開と発展——日文研共同研究からの一〇年」を開催し、この一〇年間のテレビCM研究でどのようなことが明らかとなつてきて、何がまだ不足しているのかを整理している。こうした長いスパンでの特定分野の研究への取り組みというのは簡単なようでいてなかなか難しいことだが、「日本のポピュラー・カルチャー」研究のような比較的歴史の浅い、また先行研究の蓄積も少ない分野であればあるほど、単に物珍しいトピックで論文を発表してあとは知らんぷりというのではなく、絶え間ない自己検証の積み重ねによつてのみ研究分野としての成熟が期しうるのだということを意識すべきであろう。

その上で、最後に今一度「日本のポピュラー・カルチャー」研究の「明日」へ向けて何が必要なのかについて整理してみるならば、およそ次のような点が指摘できるだろう。まず、マンガ／アニメ、あるいは映画研究にしてもそうなのだが、作家論や作品論のような作品の作り手（クリエイター）を絶対視した表象文化論的なアプローチだけでなく、①それらの作品が生み出され、世の中に流通して受容されていくプロセス全体に目配せして、その様々な場面で関わっている人たちにフォーカスした論考を積み重ねていく必要性、②産業論的なアプローチ、表現の自由と規制の問題、国家戦略との関わりなど、違った角度からポピュラー・カルチャーを捉える必要性、そして、③個々の領域のポピュラー・カルチャー研究を志向する研

究者が共通して利用できる一次資料のデータベース化の促進、といった点が指摘できよう。

いささか手前味噌だが、映画研究においてこの三つのうちの①と②を念頭に置いて運営したのが日文研の二〇一四年度の共同研究会「昭和戦後期における日本映画史の再構築」であり、そのメンバーでさらに現在、③の方向性を確立していくための「オール・ヒストリー・アーカイヴスによる戦後日本映画史の再構築」という研究会が京都大学人文科学研究所で二〇一六年度から三年間の予定でスタートした。また、日文研の図書館拡張に伴い映像アーカイヴスを充実させていくべく、現在、北浦寛之助教を中心に新たなプロジェクトが始まっている。テレビCMのデータベースについては十年前の共同研究会「コマースシャル映像にみる物質文化と情報文化」（山田班）でACC賞受賞作品のデータベースを作っているが、マンガやアニメのデータベースについても現在継続中の共同研究会「マンガ／アニメで日本研究」（山田班）で既存のデータベースの情報の集約に取り組んでいる。

今から十年後に、日文研の四十年周年記念で今一度「日本ポピュラー・カルチャー研究の昨日・今日・明日」が書かれるときに、それが二〇一六年時点でのものとうとう変わってくるのか、期待を込めて今後もこの分野の研究に関わっていきたいと思う。

参考文献一覧

●単行本

- Timothy J. Craig, *Japan Pop! : Inside the World of Japanese Popular Culture*, New York: M. E. Sharpe, Inc., 2000.
- Roland Kets, *JAPANAMERICA : How Japanese pop Culture has Invaded the U.S.*, Palgrave Macmillan, 2006.
- Helen McCarthy, *The Art of Osamu Tezuka : God of Manga*, New York: Abrams Comicsarts, 2009.
- 磯前順一・黒崎浩行編『ザ・タイガース研究論』近代映画社、二〇一五年。
- 岩淵功一『トランスナショナル・ジャパン——アジアをつなぐポピュラー文化』岩波書店、二〇〇一年。
- 草薙聡志『アメリカで日本のアニメは、どう見られてきたか?』徳間書店、二〇〇三年。
- ローランド・ケルツ『ジャパナメリカ——日本発ポップカルチャー革命』永田医訳、ランダムハウス講談社、二〇〇七年。
- 呉咏梅・王向華・谷川建司編『越境的日本大衆文化』山東人民出版社、二〇一〇年。
- 呉咏梅・王向華・谷川建司編『泛亞洲動漫研究』山東人民出版社、二〇一二年。
- 古賀令子『「かわいい」の帝国——モードとメディアと女の子たち』青土社、二〇〇九年。
- 高月靖『南極一号伝説』バジリコ、二〇〇八年。
- 『ロリコン』バジリコ、二〇〇九年。
- 谷川建司編『戦後映画の産業空間——資本・娯楽・興行』森話社、二〇一六年。
- 谷川建司・王向華・呉咏梅編『拡散するサブカルチャー——個室化する欲望と癒しの進行形』青弓社、二〇〇九年。
- 編『越境するポピュラーカルチャー——リコウランからタツキーまで』青弓社、二〇〇九年。
- 編『サブカルで読むナシヨナリズム——可視化されるアイデンティティ』青弓社、二〇一〇年。
- 編『サブカルで読むセクシュアリティ——欲望を加速させる装置と流通』青弓社、二〇一〇年。
- 谷川建司・王向華・須藤遙子・秋菊姫編『コンテンツ化する東アジア——大衆文化／メディア／アイデンティティ』青弓社、二〇一二年。
- 谷川建司・須藤遙子・王向華編『東アジアのクリエイティブ産業——文化のポリティクス』森話社、二〇一五年。
- 土佐昌樹・青柳寛編『越境するポピュラー文化と〈想像のアジア〉』めこん、二〇〇五年。
- 仲川秀樹『メディア文化の街とアイドル』学陽書房、二〇〇五年。
- スーザン・J・ネイピア『現代日本のアニメ——『AKIRA』から『千と千尋の神隠し』まで』中公叢書、二〇〇二年。
- 朴順愛・谷川建司・山田奨治編『大衆文化とナシヨナリズム』森話社、二〇一六年。
- 朴順愛・土屋礼子編『日本大衆文化と日韓関係——韓国若者の日本イメージ』三元社、二〇〇二年。
- 堀淵清治『萌えるアメリカ——米国人はいかにしてMANGAを読むようになったか』日経BP社、二〇〇六年。
- パトリック・マシアス『オタク・イン・USA——愛と誤解のAnime輸入史』太田出版、二〇〇六年。
- 松谷創一郎『ギャルと不思議ちゃん論 女の子たちの三十年戦争』原書房、二〇一二年。
- 三原龍太郎『ハルビ in USA——日本アニメ国際化の研究』NTT出版、二〇一〇年。
- 山田奨治編『文化としてのテレビ・コマーシャル』世界思想社、二〇〇七年。
- フレッド・ラッド／ハーヴィー・デネロフ著、久美薫訳『アニメが「ANIME」

になるまで——鉄腕アトム、アメリカに行く』NTT出版、二〇一〇年。  
ドナルド・リチー『イメージ・ファクトリー——日本×流行×文化』青土社、  
二〇〇五年。

●論文

Douglas McGraw, *Japan's Gross National Cool, Foreign Policy*, May-June 2002, pp. 44-54.  
Joseph Nye, *Soft Power: The Means to Success in World Politics*, New York: Public Affairs  
2004.

岡田章子「女性雑誌における欲望の主体化と消費のイデオロギー——80年代  
『an・an』におけるタイトル・レトリックの分析」『社会学研究科年報』八号、  
立教大学大学院社会学研究科、二〇〇一年。

周典芳「叶姉妹考——カルチュラル・スタディーズの視点から見るポディメイ  
キング」『年報人間科学』二三巻二号、大阪大学人間科学部社会学・人間学・  
人類学研究室、二〇〇二年。

矢部恒彦「ポピュラー・カルチャーとしての都市景観研究——カルチュラル・  
スタディーズ分野での研究成果を参考として」『学術講演梗概集 F-1  
都市計画、建築経済・住宅問題』日本建築学会、二〇〇〇年。

——「都市空間的文化としてのスケート・ボード遊び——ポピュラー・  
カルチャーとしての都市景観研究（その2）（景観とまちづくり、都市計画）  
『学術講演梗概集 F-1 都市計画、建築経済・住宅問題』日本建築学会、  
二〇〇一年。

——「公園における継続的なスケボー遊び——ポピュラー・カルチャーと  
しての都市景観研究（その3）（景観、景観イメージ、都市計画）『学術講  
演梗概集 F-1 都市計画、建築経済・住宅問題』日本建築学会、  
二〇〇五年。